

ブラジル政治は いかにアウトサイダーの台頭を防ぐのか



舛方周一郎
(神戸外語大学専任講師)

今年は政治の年

2018年はラテンアメリカ各国で大統領選挙が実施される政治の年である。ラテンアメリカの中でもブラジルの大統領選挙は、2012年前後から続いた政治経済の危機により生じた労働者党（PT）政権の終焉と、ミシェル・テメル民主運動（MDB）政権後の新時代を担う指導者を定める選挙となる。ブラジルでは政治経済の危機の時期が過ぎたようにも見えるが、政治的分断は深刻さを増す。既成政党同士の対立への疲弊感や代表制民主主義への不満から、一部では軍部の政治介入を求める声もあがる。この現状を前に、既存政治に挑戦する右派ポピュリズムが席卷し、保守・若者層を中心に右派のアウトサイダーに期待が集まる。アウトサイダーの台頭は、ブラジルの政党政治の崩壊を意味するのか。本稿の主張は既成政党に不信が高まる中でも、ブラジルの政党制度は揺らいでいないものである。

ブラジルの民政移管とその後

1985年民政移管以降の現代ブラジル政治は、民主主義の移行期（1985-1995）と定着期（1996-2010）に大別されてきた。民主主義の移行期において、ブラジルの政党政治は未成熟だった。ブラジルの政党政治は政治有力者を中心とした個人主義的な性格を帯びた政党が乱立し、個人の利益誘導が優先される傾向が強く、政治家の政党の鞍替えや、左右政党の日和見的同盟が発生してきたため、政治が不安定化しやすいとされたためである。事実、政党制度の運用の未成熟さは、1989年大統領選挙でフェルナンド・コロールというブラジルの政党政

治に揉まれていないアウトサイダーの勝利を許した。

しかし、未成熟な政党政治は民主主義の定着期に克服された。議会内で穏健左派のPTと穏健右派のブラジル社会民主党（PSDB）という二大政党間の競合がパターン化し、新自由主義改革の是非をめぐる富裕層と貧困層の意見の違いが唯一の争点となったためである。さらに安定した政党政治を定着させたのが、議会の最大勢力であるPMDB（現MDB）の存在である。大統領政党と連立を組み、調整役として国家の政策方針の急進的変動を防いだPMDBは、PTとPSDBの二大政党の競合に収斂される安定した政党政治の確立に寄与した。三政党は反軍政という理念で一致していたことで、政権交代時も政策を踏襲し、市場原理の尊重と社会政策による格差是正に取り組むことで、政治経済の安定を確固たるものとした。

民主主義の後退期？

ところが、政治経済の安定は長く続かなかつた。景気低迷の煽りをうけ、2014年大統領選挙では現職ルセフ大統領が対抗馬のPSDB候補に僅差で勝利したが、PT政権への反対勢力の影響力は拡大した。ついには、政権を担う有力政治家たちの汚職発覚やルセフ大統領自身の会計操作の罪でルセフ大統領の弾劾が成立して、13年間におよぶPT政権は終焉した。

ルセフ大統領弾劾の成立後、国家運営を任せられたテメル政権は、PT政権期に悪化した財政の健全化と、国の信用回復に向けて市場を開放して外国投資を誘致する経済改革を遂行した。2016年9月に「景気は最悪期を脱した」との見込

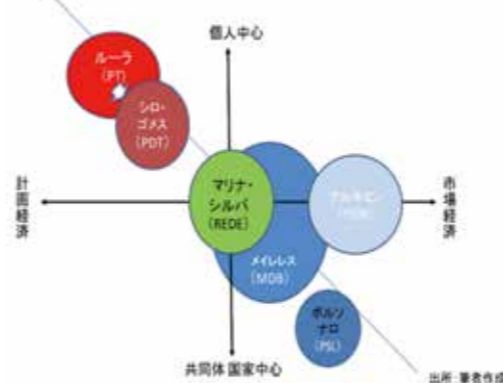
みが示されると、景気は上昇傾向となった。他方、テメル大統領は選挙不正の疑惑や汚職関与による起訴などで、大多数の市民から反発をうけた。しかしMDB中心の連立政治と議員の懐柔により難局を乗り切り、長年ブラジル・コストとされてきた労働法改正を実現した。大統領が議会内での政策調整に成功できたことは、政党制度の運用が不公平だが十分に機能している証左ともいえる。

2018年大統領選挙にむけた（不透明な）見通し

左派勢力の抗議運動も十分な存在感を発揮するものの、テメル政権以降の次期政権に保守的な経済政策の継続を望む声が大勢を占める。市場優位か国家優位か、民主主義か権威主義か、個人主義か政党志向か、という民主主義の移行期に生じた複数の対立軸が再び表面化しているのが、選挙を間近に控えた現状である。5月現在、大統領選挙には十数名の出馬が見込まれるが、9月17日の最高選挙裁判所への出馬登録日までに政党間で連立交渉が行われ、候補者はある程度まで絞られるだろう。

持続可能ネットワーク（REDE）所属の元環境相マリナ・シルバなど、政財界の汚職根絶を訴える候補者の動向に注視しつつ、保守的潮流をうけ大統領選挙の行方は、2016年地方選挙で躍進したPSDB候補のジェラルド・アルキミンが本命となる。アルキミンは、サンパウロ州を中心とした富裕層の支持を得ており、サンパウロ州知事としての実績などから経済界の信頼も厚い。ただしアルキミンは不人気率も高く、汚職捜査作戦の容疑者名簿に記載されているため、アルキミンへの汚職捜査が選挙期間中に進展

図：各政党の政策位置と候補者



する可能性も否定できない。

アルキミンの対抗馬となるのが、保守的な潮流に抵抗する左派政党の候補者である。労働者党から出馬表明するルーラは、5月時点で有権者から最も支持をえる。しかし自身の政治汚職の罪で収監されたことで大統領選挙への出馬が認められる可能性は低い。ゆえにルーラ個人を支持してきた層を、どの政党の候補者が取り込めるかが注目点となる。現状では、ルーラ政権で国家統合相を務めた実績のあるブラジル民主労働党（PDT）のシロ・ゴメスの名前などが挙がるものの、左派全体の支持を集めてきていない。

見逃せない最近の傾向

二大政党と各候補者が課題を抱えている中で、保守・若者層を中心に期待を集めるのが社会自由党（PSL）のジャイル・ボルソナロである。元軍人のボルソナロは、女性蔑視や軍政礼賛発言などで注目を集めてきた。伝統的家族価値の重視、国家再建を目指す言動、SNSを戦略的に活用して支持をえるスタイルから「ブラジルのトランプ」とも称される。

しかしボルソナロの政治スタイルは、フィリピンのロドリゴ・ドゥテルテ大統領に近い。昨今のいきすぎた自由民主主義の進展により、貧者など社会的弱者を支えてきた社会的寛容性は限界を超え、現潮流は不正を厳しく処罰する規律という道徳を求める動きに転換しつつある。司法・メディアが民主化したことで汚職や腐敗の実態が顕在化し、それに加担してきた悪しき他者（エリート）を排除し、それ以外を善良な市民（大衆）とする構

図が生まれていることも、規律を重視する保守層のボルソナロ支持につながっている。

さらに保守層の下支えになっているのが、ラテンアメリカ社会での福音派の増加である。福音派は2000年代以降から政治の舞台に登場し、支持基盤だったPTと決裂すると、国政で福音派議員団を結成する政治勢力となった。伝統的に既成政党はカトリックとの親和性が高いが、ブラジル人口の3分の1近くが福音派となった現在、多くの信者が福音派を基盤とする小政党を支持する。人工中絶や性的マイノリティであるLGBTの権利への反対はボルソナロの考えとも共鳴しており、今後は宗教票の変動が既成政治を覆す要因になる可能性もある。

ブラジル政治はいかにしてアウトサイダーの台頭を防ぐのか

ボルソナロのようなアウトサイダーを希求する流れは、ブラジルの政党制度を破損するまでに至るのか。ブラジルの政党制度は、未だ利益誘導や政見放送の時間などで現職と既成政党が優位となる構造を維持する。既成政党以外は過激な言動などでしか有権者の注目を集めることができない。多くの有権者の支持を集めようとするれば当初の姿勢より穏健化が進み、過激な言動は対抗馬のネガティブキャンペーンや対立メディアの批判対象となる。当初の主張が二転三転すれば、有権者離れも生まれやすい。

さらに選挙法改正による企業献金の禁止は、政党交付金への依存度を増やすこ

とにつながる。今回の選挙は、2015年9月に政党の選挙活動に対する企業献金の禁止などを定めた選挙資金規正関連法が導入されて初の大統領選挙となる。先の地方選挙でも、企業献金の禁止は大企業と政治家との間での癒着の温床を取り除き、公正な選挙活動の実施を促進した。しかし政党の選挙資金は、政党連合の議会占有率により振り分ける政党別交付金に依存するため、資金繰りに窮する少政党の候補者の立場は不利となる。上記の理由からボルソナロが大統領選挙に勝つ可能性は低いと考えられる。

予想されるシナリオ

大統領選を控えブラジルで表面化する問題は、民主主義の移行期にみられた諸相と類似しており、ブラジル政治は再び保守化に向かう歴史的サイクルに入った。しかし、その現状は民主主義の後退を意味していない。むしろ既成政党に不信が高まる中でも、民政下の政党制度の機能は過去の経験を教訓に強化されている。

この視点にたてば不鮮明と評される今年のブラジル大統領選挙も、ある程度まで見通しを立てることができる。本稿は、制度が強化されてきた経緯を踏まえ、現在のブラジルの政党制度は揺らいでいないことを主張した。政治の不安定化を抑える政党制度の効果は、ルーラが出馬しない前提での決選投票で、アルキミン（PSDB）とシロ・ゴメス（PDT）という左右政党の候補者が相まみえる可能性を高める。さらに選挙戦では保守勢力



支持者との写真撮影に応じるボルソナロ氏 © 筆者撮影

の優位が見込まれるが、政党制度はアウトサイダーの台頭を阻止する効果を発揮する。そうなれば、ボルソナロの支持率は選挙戦を通じて下降する。アルキミンとシロ・ゴメスの決選投票となれば、現状ではアルキミンが大統領選に勝つシナリオが有力となる。